

附 錄

○文武會規則

第一章 總 則

第一條 本會ハ會員ノ智徳ヲ研修シ體育ヲ獎勵シ兼テ會員ノ一致結合ヲ計ルヲ目的トス
 第二條 本會ヲ文武會ト稱ス
 第三條 本會ニ左ノ諸部ヲ置ク
 學藝部 遊戲部 擊劍部 柔道部 弓術部 庭球部 野球部 スケートニスグ部
 第四條 會員ハ學藝部及遊戲部ノ部員タル外其他ノ各部ニ加入シ其部員トナルコトヲ得
 但シ特別會員ハ別ニ加入ヲ要セス其技ニ加ハルコトヲ得

第二章 會 員

第五條 本學在籍ノ學生生徒ハ必ス通常會員タルヘキ義務アルモノトス
 第六條 本學ノ教官ハ特別會員タルヘキモノトス
 第七條 本學舊札幌農學校卒業生及本學ニ關係アルモノハ贊助會員トナルコトヲ得

第三章 役 員

第八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 會 頭 一名 副會頭 一名 委員長 一名 委員 十八名 但當分ノ中十七名

第九條 會頭ハ本學長ヲ推戴ス

第十條 副會頭ハ特別會員中ニ就キ委員之ヲ推薦シ會頭ノ承認ヲ得タルモノトス

第十一條 委員長ハ特別會員中ニ就キ委員之ヲ推薦シ會頭ノ承認ヲ得タルモノトス

第十二條 會頭ハ本會ヲ總攬シ會頭事故アルトキハ副會頭之ヲ代理ス

委員長ハ會頭ヲ補佐シ庶務會計ヲ監理ス

第十三條 委員ハ各科ヨリ二名ヲ選舉スルモノトス但シ當分ノ中各組ヨリ一名ヲ選舉スルモノトス

委員中主任二名ヲ互選シ庶務會計ヲ分擔セシム

第十四條 役員ハ各部ノ役員ヲ兼スルコトヲ得ス

委員長及委員ハ任期ヲ一ケ年トシ毎年二月ニ改選ス但改選ニ際シ再選セラルコトヲ得

第四章 委 員 會

第十五條 委員會ハ左ノ事項ヲ處理スル爲メ每學期ノ始メニ委員長之ヲ召集ス

但シ必要ニ應ジ臨時ニ之ヲ召集スルコトアルヘシ

一、各部ノ統一

一、豫算編成

一、本會ニ關スル重大ナル事項

第十六條 會頭ハ必要ト認メタル時特別委員中ヨリ五名ノ臨時委員ヲ指定シテ委員會ニ列席セ

シムルコトヲ得

第十七條 各部々長ハ其部ノ事務ニ關シ委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得
但シ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第十八條 委員會ハ其三分ノ二以上ノ出席アルニ非サレハ議決ヲナスコトヲ得ス
第十九條 委員會ノ決議ハ會頭ノ承認ヲ經テ之ヲ施行スルモノトス

第五章 會計

第二十條 通常會員ノ會費ハ一ケ年金壹圓五拾錢トシ左ノ三期ニ之ヲ分納スヘシ
一月 四月 九月

第二十一條 特別會員ハ會費トシテ俸給月額百分ノ一ヲ毎月納ムルモノトス
第二十二條 贊助會員ハ每年金壹圓以上ヲ納ムルモノトス

第二十三條 左ノ各項ニ該當スルモノハ會費ヲ要セス
一、贊助會員ニシテ一時金拾圓ヲ納メタルモノ
二、特別會員ヨリ贊助會員ニ轉シタルモノ

第二十四條 第二十三條第一項ノ金額ハ之ヲ基本金ニ編入スルモノトス
第二十五條 會費ハ委員會ニテ編成シタル豫算ニ從テ之ヲ使用スヘシ

但シ會計年度ハ九月ニ初マリ翌年七月ニ終ル
第二十六條 基本金ハ基本財産トシ利子ノ外使用スルコトヲ得ス

第二十七條 會頭ハ本學會計員ニ會計委員ノ事務ヲ囑托シ主任委員ト共ニ會計ヲ整理モシム
第六章 附則

第二十八條 本會ハ毎年三回會報ヲ刊行シテ會員ニ頒ツ
第二十九條 本規則修正ニ關スル發議ハ會頭ノ提出ニ係ル者ノ外委員ノ過半数或ハ會員六十名
以上ノ賛成ヲ得タル非サレハ提出スルコトヲ得ス

第三十條 本規則ニ關スル修正ハ委員會ヲ開キ五分ノ四以上ノ出席ヲ以ノ半数以上ノ同意ニヨ
リテ決ス

○文武會各部通則

第一條 各部々左ノ役員ヲ置ク
部長 一名 幹事 若干名

第二條 部長ハ特別會員中ヨリ各部幹事之ヲ選定スルモノトス
第三條 幹事ハ各部々員中ヨリ互選スルモノトス
幹事中主任一名ヲ定ム

第四條 幹事ノ任期ヲ一ケ年トシ毎年二月ニ改選スヘス
但シ再選スルコトヲ得

第五條 役員ハ專任トス但シ部長ハ二部ヲ兼ヌルコトヲ得

第六條 學藝部及遊戯部ノ經費ハ本會ノ負擔トシ其他ノ各部ニハ一定ノ補助金ヲ給シ特別ノ會計ヲ立テシム

第七條 此通則ニ隨ヒ各部細則ヲ規定シ會頭ノ承認ヲ經テ之ヲ施行スヘシ

●學藝部細則

第一條 本部ハ會員ノ精神の修養ニ資シ相互ノ氣脈ヲ通スルノ目的ヲ以テ會報ノ發行、演說及講話會ノ開催其他一般學藝ニ關スル事務ヲ掌ルモノトス

第二條 本部ハ文武會通常會員ヲ以テ組織ス

第三條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

部長 一名 幹事 各組一名

第四條 演說及講話會ハ毎月一回第一土曜日之ヲ開催ス

但時宜ニヨリ臨時之ヲ開催シ公衆ノ傍聽ヲ許スコトアルヘシ

第五條 會報發行ノ時期ハ左ノ如シ

十一月 二月 五月

●遊戯部細則

第一條 本部ハ文武會規則ニ從ヒ遠足及遊戯會ニ關スル萬般ノ事項ヲ處理スルモノトス

第二條 一年一回五月ニ於テ遊戯會ヲ開キ一年二回二月及十月ニ於テ遠足會ヲ催ス

第三條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

部長 一名 幹事 十七名

第四條 本部幹事ハ各組ヨリ一名宛ヲ互選スルモノトス部長ハ幹事之レヲ本學教官ヨリ推選シ

主任幹事ハ幹事中ヨリ互選スルモノトス

●庭球部細則

第一條 本部ハ文武會通常會員中ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置テ事務ヲ掌理ス

一、部長 一名

一、幹事 七名 主任 一名 會計 一名 各コート幹事 一名宛

第三條 本部々員ハ毎月金十錢宛テ會計幹事ニ納付スヘシ

但シ臨時會費ヲ徵集スルコトアルヘシ

第四條 新ニ入部セシトスルモノハ入部金十五錢ヲ納付スヘシ

第五條 本部々員ニシテ其責任ヲ盡ササルモノハ除名ス

●野球部細則

第一條 本部ハ文武會通常會員中ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、部長 一名 幹事 五名

第三條 本部々員ハ毎月部費トシテ金五錢ヲ納付スヘシ

第四條 本部々員ニシテ其責任ヲ盡サハルモノハ除名ス

●弓術部細則

第一條 本部ハ文武會通常會員ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、部長 一名 幹事 五名

第三條 本部々員ハ旅費トシテ毎月金五錢宛ヲ納付スヘシ

第四條 春秋二季大會ヲ開ク

第五條 本部々員ニシテ其責任ヲ盡サハルモノハ除名ス

●柔道部細則

第一條 本部ハ文武會通常會員ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、部長 一名 幹事 五名

第三條 本部員ハ部費トシテ毎月金三錢ヲ納付スヘシ

第四條 毎學期小集會ヲ開キ一學年二回大會ヲ開ク

第五條 部員ニシテ其資格ヲ失フ者ハ除名ス

●擊劍部細則

第一條 有部ハ文武會通常會員ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、部長 一名

一、幹事 五名 (内一名ヲ主任トス)

第三條 本部々員ハ部費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス

第四條 本部ハ年三回小集會ヲ一回大會ヲ開ク

●スケイティング部細則

第一條 本部ハ文武會通常會員ノ有志者ヲ以テ組織ス

第二條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、部長 一名 幹事 六名

第三條 本部開設時期ハ毎年十二月ニ初マリ翌年三月ニ至四ヶ月間トス

第四條 本部員ハ開設時期ノ間毎月金拾錢ヲ納付スヘシ

○東北帝國大學農科大學開校式記事

明治四十年九月十一日農科大學水產學科教室樓上式場ニ充テ東北帝國大學農科大學開校式ヲ舉行ス其次第左ノ如シ

是日天氣晴朗午前九時頃ヨリ來賓續々來會ス之ヲ區分シテ各休憩所ニ案内シ十時前ヨリ職員來賓學生生徒順次著席ス是ヨリ先區内小學校生徒數千人來リテ式場外ニ整列ス既ニシテ牧野文部大臣一行ノ來臨スルヤ小學生生徒旗ヲ揮ヒ一齊ニ萬歳ヲ唱フ來賓以下著席終ルヤ佐藤學長先導シテ文部大臣以下文武勅任官式場ニ入ル座定リ佐藤學長開校式ヲ舉行スルコトヲ宣言ス是ニ於テ樂隊君ケ代ヲ奏シ一同最敬禮ヲ行フ樂畢リ佐藤學長教育勅語ヲ捧讀ス次ニ佐藤學長式辭ヲ朗讀ス其文ニ曰ク

地ヲ拓キ民ヲ植フルハ經國ノ大本ニシテ爲政ノ要務ナリ學ヲ建テ土ヲ造ルハ文化ノ要道ニシテ治國ノ本源ナリ恭ク惟ルニ明治維新

皇上萬機ヲ親裁シ給フニ當リ廣ク宇内ノ大勢ニ鑒ミ遠ク國運ノ將來ヲ察シ以テ中興ノ國是ヲ定メラル、ヤ首トシテ我北海道拓地植民ノ鴻謀ヲ布キ國家永遠ノ富源ヲ開キ人文旺盛ノ基礎ヲ立テタル是ニ於テ時ノ職司黒田開拓長官ハ能ク

聖意ノ在ル所ヲ奉體シ銳意拓植ヲ進歩ス爾ト同時ニ學制ヲ振興シ人材ヲ養成スルヲ以テ急務ト爲シ俊秀ノ子弟ヲ撰ヒ日新ノ農理農藝ヲ講究セシム是レ即チ札幌農學校ノ濫觴ナリ

爾來星霜ヲ積ムコト三十有餘年政務學則共ニ幾多ノ沿革アリト雖モ要スルニ時勢ノ進歩ト文運ノ勃興ニ伴ヒ拓植ノ實績益々顯著ニシテ富源ノ増大ナル混ヤトシテ蓋キサルモノアリ青英ノ事業亦大ニ伸張シ有用ノ人材ヲ輩出スルコト尙シトセス爾レ此間ニ於ケル我國内外ノ形勢ヲ觀察スルニ國威スハ絃ニ加ハリ

皇澤遐邇ニ覃ヒ北樺太ノ舊領土ヲ復シ南臺灣ノ新版圖ヲ廣メ滿韓ノ施設亦經綸ニ待ツモノ多端ナルヲ以テ人材ノ需要日ニ加ハリ育英ノ事業亦益々急ナルモノアリ

願フニ文物ノ興隆ハ國家元氣ノ發動ニ基ク明治九年本校ノ起ルヤ札幌ノ人口僅ニ二千人四圍常ニ蠻煙瘴雨ニ蔽ハレ實ニ荒涼寂寥ノ境タリ然レトモ笈ヲ負ヒ來リテ此校ニ學フモノ時代ノ精神ニ富ミ進取ノ氣概ニ乏シカラズ十五年廢使置縣トナルヤ學事亦一頓挫ヲ來セリト雖モ十九年廢縣置廳ニ至テ拓植ノ氣運再ヒ勃興シ本校教育ノ機關亦稍々面目ヲ改メ既ニシテ憲政實施ノ始ニ當リ經費削減ノ非運ニ會シ本校ノ存廢未タ知ルヘカラサルノ極ニ達ス二十七八年日清戰役後忽チ實業ノ進歩ト其教育ノ發展ハ漸ク既往ノ頽勢ヲ挽回シ校舍改築ノ舉アリ三十二年新校舍落成ヲ見ルニ至ル未タ幾ナラス日露戰役後ノ影響始テ一大發展ヲ爲スノ氣運ニ向ヒ學科ノ増置ト共ニ諸般ノ設備ヲ完了シ内外相待テ益々其特長ヲ發揮シ遠ク海外ヨリ留學生ノ來ルアリ又卒業生ノ供給殆ト其需要ヲ充タズ能ハサルノ勢ナリ今茲遂ニ東北帝國大學ヲ創設シ本校ヲ以テ農科大學ノ組織ニ改メ更ニ學科ヲ増設シ定員ヲ増加シ大ニ其規模ヲ擴張スルニ至ル是レ國家文運ノ隆盛ナルト文教當局ノ規畫其宜ヲ得ルニ因ルト雖モ抑モ亦時勢ノ要求ト

輿論ノ後援之ヲシテ然ラシムルニ非ズハナラズ吾人此盛時ニ遭遇シ欣喜措ク能ハサル共ニ轉ダ今昔ノ感ニ堪ヘキルナリ

今ヤ本道ハ交通機關大ニ備リ陸ニ鐵路ノ貫通スルアリ海ニ港灣ノ修築スルアリ田野大ニ闢ケ物産盛ニ興リ山林石富河海ノ利盡ク開發セラントス之ヲ三十餘年前ノ榛莽天ヲ遮リテ畫猶暗ク照熊途ニ當テ人畜ヲ害スルノ時ニ比スレハ其相去ル天淵宮ナラス而シテ此ノ隆盛ニ至ルハ畢竟維新當初ノ宏遠ナル願ノ現實スルノミナラス農政ノ擴張下文教ノ發展ト相須テ然ルモノナレハ將來實業ノ開進ニ隨ヒ農工林業水産ヲ論セス學理ト實務ト密接ナル關係益々深キヲ加ヘ本道ニ於ケル本大學ノ地位ハ更ニ重要ナルヘキヲ知ルニ足レリ蓋學校ノ生命ハ永遠無窮ニ涉ルベキモノニシテ歲月ト共ニ益々改良發達スルヲ要ス之ヲ例スレハ米國ノハーバートエール兩大學ノ如キハ其建設ノ初ニ在テハ微々タル植民地ノ一校ニ過キヤリシト雖モ今ヤ世界有數ノ大學タリ本大學ハ僅ニ三十餘年ノ經歷ヲ以テ漸ク學海ニ出ントス將來ニ於テ層一層ノ大發展ヲ期セサルヘケンヤ

凡ソ學理ハ世界ヲ通シテ勳カズ學藝ハ天下ヲ共ニシテ偏ラス先哲ニ鑑ミ後賢ヲ啓キ造化ノ妙用ヲ闡明シ字内ノ大經ヲ彌綸スルハ學者ノ本務タル况ヤ輓近國運ノ發展ハ人材ニ期待スル最モ多クナルヲ故ニ其學術技藝ノ優秀卓越ナル者ト其人格氣象ノ高潔雄大ナル者トヲ以テ膨脹的帝國ノ鴻圖ヲ翼贊セシメント欲セハ高等ノ教育益々發展ヲ圖ラスシテ可ナランヤ果シテ然ラハ本大學ノ任務亦重且大ナリト謂フヘシ

本日 文部大臣閣下ノ臨場ニ朝野貴紳ノ參列ヲ辱スシ此開校式ヲ舉クルヲ得タルハ特ニ昌介等ノ光榮トスル所ナリ希クハ自今以後益々驚鈍ヲ盡シ相共ニ學生生徒ノ訓育指導ニ從事シ以テ國家ト社會ノ須要ニ應スルノ實ヲ舉グ上バ以テ皇上下ノ優渥ナル聖意ニ對ヘ奉リ下バ以テ天下萬衆ノ屬望ニ辜負スルナカランコトヲ期ス聊カ所懐ヲ陳述シ以テ式辭ト爲スト云爾

明治四十年九月十一日

東北大學農科大學長農學博士 佐藤 昌介

文部大臣祝詞ヲ寄ラル曰ク

本日 東北帝國大學農科大學開校ノ式ヲ舉グルニ當リ親シク來リテ此盛典ニ臨ミ祝詞ヲ述フルハ本大臣ノ深ク喜ブ所ナリ

抑モ本學ノ前身タル札幌農學校ハ創立以來茲ニ三十餘年我邦高等農業教育ノ機關トシテ最モ形勢ノ位置ヲ占メ經營發達ニ幾多有爲ノ人士ヲ育成シ或ハ近ク所在北海道ノ拓地殖民ニ或ハ廣ク國家各方面ノ事業ニ須要ノ材器ヲ供給シ國運ノ進歩ニ貢獻セルコト寔ニ尠少ナリトセス名聲夙ニ高ク功績周知ラレ今ヤ我邦戰勝ノ後ツ承ゲ教育ノ隆盛ヲ期スル益々切ナル人秋ニ方リ國家ハ東北帝國大學ヲ設立シ其一著歩トシテ札幌農學校ヲ進メテ農科大學ト爲セリ是レ固ヨリ世運發展ノ然ラシムル所ナリト言ヘ抑亦札幌農學校職員出身者諸君ガ盡瘁精勵終

始一貫シテ當初ノ目的ヲ達スルニ力ヲ能ク今日ノ成果ヲ收メルニ基因セシムルヲ以テ夫レ
斯ノ如ク實業專門ノ學校ハ進テ分科大學ノ一トナリ高等ノ學校ハ轉シテ最高ノ學府トナレリ
自今正ニ帝國大學令ノ規定ニ基キ學理ノ蘊奧ヲ攻究シ兼テ國家須要ノ人物ヲ養成セサルヘカ
ラス今ヤ學術ノ進歩ハ日ニ著シク列國文運ノ風潮月ニ新ナリ此時ニ方リ我大學タルモノ宜
ク進テ博ク智識ヲ東西ニ求メ深ク其精髓ヲ究メ退テ攻究練磨ノ功ヲ重キ以テ我學界ノ英華ヲ
發揚センコトヲ要ス且夫レ本學ノ位置タル北海道ハ由來境域廣ク地味肥ヘ頗ル農業上ノ物質
ニ富メリ學理ノ應用實驗ヲ試ムルニ於テ遺憾ナシ本學ノ職員諸君克ク茲ニ鑑ミ徒ヲ紹キ來テ
開クノ精神ヲ以テ力ヲ戮セ心ヲ一ニシ蘊奧ヲ極メ教養ニ力メ又學生諸子ハ克ク師長ノ指導ニ
遵ヒ其學術ヲ研鑽シ品性ヲ鍛練シ以テ將來ノ大成ヲ期セハ本學ハ東北大學ノ先驅トシテ克ク
西既ノ大學ト相待シ國家ノ期待スル優官ニ副フニ庶幾カラシムカ

明治四十年九月十一日

文部大臣 牧野 伸 顯

文部大臣登壇演說ヲナナス其要旨ヲ摘録スレバ左ノ如シ
北海道ハ風土氣候其他社會的事情ヨリシテ速ニ大學ヲ設立スヘキ好位置タルニモ拘ラス國庫
財政上ノ點ヨリシテ其機運ニ進マナリシカ幸ニ古河家カ百六十萬圓ヲ九州及東北大學設立費
ニ獻納セント贈ヒ且ツ其使用ニ就テハ無條件ナリシカ爲メ始メテ其機運漸ク豫算ヲ編成シ
前期議會ノ協賛ヲ經テ今日アルニ至リタレハ此美舉ハ永遠ニ紀念スヘキモノニシテ本大學ノ

歴史ト特筆大書スルキコトヲ借テ今日必學理應用ノ時代ニシテ此時期ニ本大學ヲ開キ學問
智識ヲ本部ノ成立セシムル蓋シ本道人士ニ同ノ大ニ満足スル所ナラン願フニ本校ハ學術ノ蘊奧
ヲ究ムル大學ナシハ學生ノ專心ニ意ヲ研鑽スルハ勿論ナレトモ是レノミニテハ未ダ足レリ
トスヘカラス其研鑽ノ結果ハ務メテ實地ト接近スルコト必要ナレハ成ルヘク實地ニ應用スル
コトヲ主トシテ豫メ其結果ハ廣ク世間ニ發表シテ利益ヲ世間ニ振ツノ方針ヲ取テ取テコトヲ希
望ス此事タル獨リ本邦ニノミ必要ナルニ非ス歐米諸國ノ如キ風ニ此方針ヲ取テ取テ數十年來汲
々トシテ茲ニ努メツ、アリ即チ學問ノ淵藪タル大學ニ在テハ學術ノ蘊奧ヲ研究スルト共ニ之
ヲ實地ニ應用スルニ探廣ク一般ニ之ヲ結果ヲ發表シテ國民ヲ指導スルコトヲ重ナル目的トシツ
、アリ是故ニ新ニ開設スル大學ノ如キハ殊ニ此方針ヲ以テ平民的ノ施設トナセリ現ニ頃日新
聞紙ノ報道ヲ見ルニ英國皇帝ハ過般大學開設ノ爲メウエルズニ行幸在ラセラレ其勅語中ニモ
此意味ヲ以テ大ニ獎勵セラレ學理ヲ基礎トスル大學ノ改進ヲ企圖スルコトニ軫念ヲ勞セラル
、コトヲ報セリ又米國ノ如キモ高等教育ニ重キヲ置キ主トシテ此方針ヲ以テ國民ヲ獎勵シ、
アリ故ニ本校ノ如キモ專ラ此方針ヲ取ラシムルコトヲ切望ス、
次ニ尙ホ二三ノ希望スヘキコトヲ此席ヲ借リテ之ヲ述ヘ、第一從來ノ教育方法ハ所謂詰込
主義ニシテ學生ノ學校ヲアルキ只免狀ヲ得シカ爲メニミ修學シ一タヒ卒業スルニ至リ學問ノ研
究ヲホサヌ全ク之ヲ等間ニ附スル不傾向アリ是レ實ニ憂ラヘキ傾向ナリハ學生諸君ハ假令卒
業後ト雖モ益々研究ヲ怠ラズ終身學問ノ爲メニ忠實ナラシムコトヲ望ム

第三近來全國一般ニ學生ノ外國語ニ於テ其素養乏キコトナリ此舉ハ主トシテ大學教授ニ依
リ唱道セラレタルアルカ此言タル不幸ニシテ事實ナリ今ヤ時勢ハ段々乎トシテ進歩ハ外國文
字ヲ應用シ外國語ヲ利用セサルヘカラサレ範圍益々廣大トナリタルニモ拘ラズ此不幸ナル事
實アリ本邦學生ノ前途實ニ寒心ニ堪ヘス凡ソ外國語ヲ熱心ニ研究スルハ獨リ新智識ヲ得ルノ
ミナラス學生一身ノ修養上ニ於テモ其處世上ニ於テモ最モ必要ナル事ナレハ學生諸君ハ深ク
留意セラレモコトヲ要ス
總三權大宰部ハ日露戰役ノ結果帝國領土ニ歸シタルニ就テハ將來同島ノ經營ハ專ラ北海道人
出ニ待テサルカラス開ク所ニ依リハ同島ノ利源其他一般ノ事未ダ充分ノ調査ヲ經スト蓋シ
是等ノ調査研究ハ當大學ニ於ケル適當ノ任務オラント信ス故ニ當大學ニ在ル所ノ諸君ハ此點
ニ就テハ深ク留意セラレンコトヲ望ム
之ヲ要スルニ北海道ハ明治ノ世ニ於テ成功セタルモノ最モ大ナルモノニシテ又札幌農學校
ハ北海道ニ於テ成功セシモノ最モ大ナルモノ而シテ今回當農科大學ノ成立ハ實ニ他日獨立
ノ北海大學ヲ成立セシムルニ基礎ヲシテ諸君ハ深ク此意ヲ諒シ本大學ノ美果ヲ收ムル機大ニ
努力セラレシコトヲ切望ス尙ホ終ニ臨ニ特ニ一言スヘキハ本大學ハ今ヤ如斯ニテ芽出度成
立シ且ツ多數ノ教官各其人ヲ得テ善長ナル教育ヲ受クルハ學生諸君ノ至大ナル幸福ト謂フヘ
ク畢竟スガニ如斯ハ一ニ
聖恩ノ然ラシキ所ナレハ諸君ハ深ク且ツ

聖恩ノ優渥ナルコトヲ忘レザランコトヲ望ム云々
次ニ高岡北海道廳事務官ハ原内務大臣ノ祝詞ヲ代讀ス

祝詞

本日東北帝國大學農科大學開校ノ式典ヲ舉グルニ方リ余ハ一言國家ノ爲ニ之ヲ祝セサルヘカ
ラス夫レ北海道ノ富源タル深ク且ツ大ナルコト今更喋々ヲ須タス而シテ其大部分ノ農業ニ在
ルヤ亦論ナキ所ナリ故ニ政府夙ニ札幌農學校ヲ設立シテ斯學ハ蘊奧ヲ究ノ人材ヲ育成シテ以
テ斯業ノ開發ニ努メシム爾來數十年其効果ノ及フ所獨リ北海道ニ止ラス今ヤ一步ヲ進メテ之
ヲ大學ト爲ス余ハ過去ニ於テ既ニ幾多ノ歴史ヲ有スル此一大學校カ將來益々有用ノ人材ヲ輩
出シテ農業界ニ貢獻スル所大ナルヘキヲ信シ國家ノ爲ニ其開校ヲ祝スルモノナリ望ムラクハ
當局諸子匪勉事ニ從ヒ農科大學ノ名譽ヲ發揚セラレンコトヲ
明治四十年九月十一日

内務大臣 原

敬

次ニ馬場函館控訴院長ハ松田司法大臣ノ祝辭ヲ代讀ス

祝詞

東北帝國大學農科大學ノ開校式ヲ舉行セラルニ方リ茲ニ一言ノ蕪辭ヲ贈リ以テ之ヲ祝スル
ノ機會ヲ得タルハ余ノ甚ク喜ソ所ナリ
蓋シ帝國大學ハ唯ニ學理ノ蘊奧ヲ極ムル所タルノミナラス又實ニ有爲ノ人材ヲ養成スル所ナ

而シテ今ヤ我帝國運大偉大ナル發展ト學藝ノ著シキ進歩トハ從來ツ東京京都ニ於ルニ偏ス
帝國大學ヲ以テ之ヲ終ニ其要求ニ應スル能ハサルニ至リシヲ以テ曩ニハ福岡醫科大學ヲ設
立セラルベシアリ今又茲ニ東北大學農科大學ノ設立セラレヌ見ルニ至リ誠ニ國家ノ慶事トス
抑モ農林經營ノ事タテ其消長ハ直ニ國家ノ盛衰ニ關ス故ニ之ノカ改良進歩ハ國運ノ發展ト相
待テ一日モ緩マズ可カラズ況ヤ日清日露ニ大戰役ノ結果トシテ臺灣樺太ノ新領土ヲ併有スル
ニ至リ農林事業ノ經營ス可キモノ亦タ多ク益ス多キヲ加ヘタルハ今日ニ於テオヤ此時ニ當リ
テ斯學ヲ興スルニ至ルヤ期ニ待テ可キナリ若シ夫レ本校ノ光輝アル沿革ノ如キハ既ニ世人ノ知
悉スル所復タ贅言ヲ須キス余ハ唯々本校ノ益々隆盛ナランニトテ漸々進ニ大白ヲ舉ケテ滿腔
ヲ祝意ヲ表ス

明治四十年九月十一日

司法大臣 松田正久

次ニ橋本教授ハ舊陸海軍大臣松岡農商務大臣ノ祝電ヲ披露ス

海軍大臣ノ祝電

茲ニ貴大學開校ノ盛典ヲ舉ケラル、ノ報ヲ聞キ滿腔ノ祝意ヲ表ス尙ホ邦家ノ爲メ前途ノ發展
ヲ期ス

農商務大臣ノ祝電

農業ノ爲メ特ニ東北地方ヲ爲メニ慶賀ニ堪ヘス進カニ本日ノ開校式ヲ祝ス
次ニ北海道廳長官河島靜登演説ヲナシ

國家盛衰ノ岐ルトコロ實業ノ興廢ニ在リ其興ルヤ必ス先ツ之ヲ前ニ爲シテ實多クナルハナシ即
チ學理ヲ攻ムルノ校是レナリ校能ク英ヲ育シテ實業ノ指針トナス苟モ其利ヲ知ラハ則チ力ヲ
盡シ慮ヲ殫シ以テ其根柢ヲ養ハスレハアルヘカダズ抑モ斯ノ校ノ札幌農學校ト稱セラレテヨ
リ此ニ三十有餘年其間或ハ心ヲ苦シメシコトアラシク或ハ情ヲ忍ビシコトアラシク其爲ス所ニ拂
乱セシコトアラシク又其地體ヲ大ニ進メシコトアラシク情ヲ忍ビシコトアラシク其爲ス所ニ拂
ノ花初テ開キ茲ニ開校ノ式ヲ舉ラル洵ニ欣杯ニ堪ヘサルナリ嗟々機運既ニ熟シテ天下漸ク廣
シ火耕牛魚ノ地多ク益々在ルアリ希クハ往時ノ幾多變故ヲ追憶シテ尙ホ奮然激勵能ク其美ヲ
育シ其學理ヲ火耕牛魚ノ地ニ擴充シテ大果ヲ結ヒ以テ國家ノ奎運ニ副ヘラレンコトヲ

明治四十年九月十二日

衆議院議員 淺野 勘

次ニ東京青山學院監督ハオス博士演説ヲナシ

次ニ左ノ祝詞ヲ披露ス

侯爵須賀茂親祝詞
札幌農學校ヲ組織シテ東北帝國大學農科大學ト爲ルヤ本日ヲトシ其開校式ヲ舉行セラル

實ニ國家ノ爲ニ慶賀ニ堪ヘサルナリ
 回顧スレハ札幌農學校ハ北海道拓地殖民政策ニ基キ開創セラレタルモノニシテ其事業ノ進運
 ト共ニ幾多改良進歩ヲ爲シ以テ今日ノ隆盛ニ至ルモノナリ既往三十有餘年間ニ俊秀ノ人材ヲ
 造リ出スコト頗ル多ク其國家ニ貢獻スル所ノ功績亦大ナリト謂フヘシ
 今ヤ國運ノ發展ト共ニ益々其規模ヲ擴張シ其設備ヲ完全ニシ更ニ多ク國家必須ノ人材ヲ養成
 スルヲ得ルニ至ルハ固ヨリ國家文政ノ伸張ニ因ルト雖モ抑モ亦該校既往ノ成績著大ナルノ結
 果ニ外ナラザルヲ知ルヘシ
 自今以後大學ノ基礎鞏固オルト共ニ更ニ幾多ノ英才ヲ輩出シ皆能ク國家有用ノ大器トナリ殊
 ニ北海道實業社會ノ先導者タルヘキハ深ク信シテ疑ハサル所ナリ本日此盛典ニ列スルヲ得サ
 ルヲ以テ遙ニ一言ヲ寄セ以テ祝意ヲ表ス

明治四十年九月十一日

男爵岩村通俊祝詞

惟フニ本邦ノ氣運當サニ東北ニ向テ發展スヘキモノ固ヨリ一ニ非ス帝國大學ヲ適地ニ置キ人
 材ヲ養成シ國家ノ利益スルカ如キ蓋其一也況北海道ノ如キ拓地殖民年ニ月ニ多キヲ加ヘ前途
 洋々多望ノ地ニ於ケルオヤ通俊ノ該道ニ於ケル關係淺カラス常ニ之ヲ念頭ニ懸ケ日夜忘ル、
 能ハサル所今先ツ農科大學ヲ札幌ニ置キ茲ニ開校ノ式ヲ舉グ所ト聞ク亦人文ヲ進メ國力ヲ増

正二位勳一等侯爵 岩村通俊

スノ一道ナリ何ソ欣抃ノ情ニ堪ヘン乃チ數言ヲ裁シ遙ニ之ヲ祝シ并ニ他日ノ大成ヲ期スト云
 フ
 明治四十年九月

男爵關所廣丈祝詞

札幌農學校ハ舊開拓使創業ノ際拓地殖民ノ業學理ヲ應用シテ其成功ヲ期セシメントシ建タレ
 タル學校ニシテ廣丈モ會テ職ヲ校長ニ奉シタル事アリ然ルモ今ヤ廟議校位ヲ進メラレ大學校
 トナスニ至リ本日ヲ以テ開校ノ式ヲ舉行セラル廣丈等ノ歡喜何事カ之ニ加ヘン將來益大學ノ
 隆盛ヲ期シ併セラ本道ノ繁榮ヲ祈リ恭シク祝詞ヲ呈ス

明治四十年九月十一日

正三位男爵 關所廣丈

老ぬれとうれしきとしのめぐりきて
 文の林のはなを見るかな

佐藤秀顯祝詞

明治五年ニ開設セラレタル開拓使假學校ノ芝山内ヨリ移リテ札幌農學校トナリ更ニ進ミテ東
 北帝國大學農科大學トナルニ至ルマテ三十有五年ノ間該校心田ノ墾闢ハ小ハ北海道ノ拓殖大
 ハ帝國國運ノ發展ニ盛ヲ競ヒ美ヲ爭フモノ、如ク故黒田伯ノ創立故クラ一ク氏ノ指南等ヲ追

懐シ悲喜交々、今昔ノ感何シ極マラン敢テ辭ヲ述ヘ難ク説ス

明治四十年九月十一日

正四位勳二等 佐藤 秀 顯

貴族院議員辻新次祝詞

我カ邦維新以來百般ノ制度及ヒ事業ハ發々トシテ其ノ歩ヲ進メ以テ國家今日ノ隆昌ヲ致シタリ教育ノ制度及ヒ事業亦之ニ伴ヒ著々其効ヲ奏セシカ前後兩度ノ外役ハ國民ヲシテ深ク教育ノ必要ヲ感セシメ學政ノ振張教育機關ノ整備ヲ冀ハシテ東北帝國大學九州大學等ノ新設ニ關スル請願建議活クハ質問ハ毎回ノ帝國議會ニ現ハレナルハナカリキ而シテ政府モ亦其要ヲ感シ遂ニ東北帝國大學設置ニ決シ札幌農學校ヲ進メテ全大學農科大學トセリ是レ本日ヲトシ本農科大學カ開校式舉行ノ盛典アルヲ致セル所以ナリ

惟ラニ北海道ノ地タル沃野千里山ニ鑄海ニ煮ルヘシタ然モ住民尙ホ稀ナリ本大學ノ前身タル札幌農學校ノ此ノ地ニ設置セラレタル所以ハ蓋シ之ヲシテ本道ノ拓殖發展ニ寄與スル所ナラシメント欲シタナリ空校ハ誠ノ創設既ニ久シク濟々タル多士ヲ出タシ校風亦世ニ噴ケリ而シテ今ヤ進ミテ大學トナル其聲價益々揚カリ其ノ功績愈々顯ハレ本道ハ勿論全帝國ニ貢獻スルコト大クハハ亦疑ヲ容レサル所ナリ茲ニ本日ノ開校式ニ際シ一言所思ヲ述ヘテ祝詞トス

明治四十年九月十一日

辻 新 次

次ニ森源三祝詞ヲ述フ曰ク

本大學ノ前身タル札幌農學校ハ遠ク明治四年ノ開始ニ係リ爾來其位價ヲ轉スルコト三タヒ今ヤ大學組織始メテ成リ本日開校ノ典ヲ奉ケラレハ至ルハ國家文運ノ隆盛ナルヲ祝スルト共ニ北海道ノ光榮ヲ賀セサルヲ得ンヤ熱々惟ルニ初開拓使ニ於テ學校ヲ設ケ有用ノ人才ヲ養成シ以テ拓地殖民ノ實ヲ擧ゲテ百方經營セラレシモ如何セン當時人烟稀疎ヲシテ全道僅ニ十餘萬人ニ過キ不故ニ專ラ屯田策ヲ建テ其事業ヲ擴張スルノ已ムヲ得サルニ至レリ然レニ歲月ヲ經ルニ隨ヒ交通機關大ニ備レト共ニ拓殖事業大ニ進歩シ以テ今日ノ盛況ヲ及ヘリ而シテ此盛大ヲ致ス所以ノ原因ハ固ヨリ一ニ止マラスト雖モ就中本校設置以來職員教官諸彦幾多ノ困苦ヲ凌キ常ニ勉勵忠實ニシテ以テ多數ノ卒業生ヲ出シ其出身者モ亦能ク學理ヲ實地ニ應用シ殖産興業ニ貢獻シタル功與リテ多キニ居ルヲ知ルヘシ自今本大學ハ益々隆盛ニ赴キ本道拓殖ノ大成ヲ期スヘキハ論ヲ待タズ殊ニ本道ノ風土氣候ハ學生修養上最モ適當ナルモノナレハ凡ソ本大學ニ在テ研鑽スル者ハ常ニ此純潔雄大ナル自然ノ感化ヲ受テ國家有用ノ大器ヲ成シ本大學學生徒ハ此ニ勵ルナカランコト希冀ニ堪ベサルナリ曠三ハ多年本校ト淺カラサル緣故アルヲ以テ其一大發展ヲ見テ雀躍ノ至リ堪ヘス聊カ燕言ヲ陳ヘテ祝詞ニ代フ

明治四十年九月十一日

從六位 森 源 三

次ニ左ノ祝電祝詞ヲ披露ス

六二五

貴族院議員	公爵	二條基弘	祝電
貴族院議員	男爵	久保田讓	祝電
貴族院議員	男爵	大迫尚敏	祝電
臺灣總督府民政長官	原保太郎	祝電	
東京帝國大學總長	演辰	已祝電	
貴族院議員	寺田勇吉	新祝電	
貴族院議員	木場貞長	祝電	
京都帝國大學總長事務取扱	小山健三	祝電	
東京帝國大學文科長	久原躬三	祝電	
東京帝國大學農科大學長	坪井九馬三	祝電	
盛岡高等農林學校長	松井直吉	祝電	
仙臺醫學專門學校長	玉利喜造	祝電	
第二高等學校長中川元	山形仲藝	祝電	
東京音樂學校校長	中川謙二	祝電	
東京音學學校校長	湯原元一	祝電	
京都醫科大學教授	伊藤準三	祝電	

岡山縣知事 寺田祐之 祝電
 玉縣知事 大久保利武 祝電

宮崎縣知事 永井環信書ノ要旨
 小生曾ア北海道廳在職中屢々貴校ヲ參觀シ卒業學士諸君カ北海道拓殖開發上多大ノ貢獻ヲナシ將來一層之レカ擴張ノ必要アルモノト信シ居リ今般念々多年ノ功益相顯レ農科大學ノ開校ヲ見ルニ至ルハ是全ク尊臺カ多年全校育英事業ニ盡瘁セラレタル結果ニシテ御宿望ヲ達セラレタルモノト信シ尊臺ノ御成功ニ對シ滿腔ノ熱誠ヲ以テ祝意ヲ表ス南北途遠クシテ盛典ニ參列スルノ榮ヲ得サルハ願遺憾ニスル所ナリ云々

次ニ宮城縣事務官下條幸次郎並知事ニ代リ臨場其祝辭ヲ朗讀ス曰ク
 我カ東北ノ地由來高等教育ノ機關ニ乏シク人材ノ養成他地方ニ比シテ一籌ヲ輸スルノ憾ナシトモ就中大學ノ設置ハ實ニ地方士民カ多年熱望措カサル所ナリキ
 獨リ本校ハ大學ノ名稱ヲ有セサリシモ夙ニ大學タルノ要素ヲ具ヘ且ツ其ノ教養ノ方針ハ最モ人格ノ完成ニ重ク置キタルヲ以テ幾多ノ俊魁ヲ陶冶シテ各種ノ方面ニ活動セシメ國家社會ニ貢獻シタルコト尠カラズ今ヤ政府ハ東北帝國大學建設ヲ發表シ本校ヲ以テ東北帝國大學トナシ本日ヲトシテ開校ノ式典ヲ舉行セラル既ニ大學タル實ヲ具ヘタル本校ハ是ニ於テ始テ其名ヲモ得名實併セテ相備アルヲ得タリ不肖英三郎本校前途ノ盛運ニ想到シテ轉々慶賀ノ情ヲ堪ヘサルモノアリ

惟ニ近時我カ國運振古未會有ノ發展ヲナセルコト伴ヒ社會ハ其ノ最高經營者トシテ操徳アリ
學識アリ手腕アル人材ヲ供給ヲ須コト益急ナリ而シテ從來本校ノ採リ來ル人物養成ノ注
義ハ學校名稱ノ改マルト共ニ大ニ其特色ヲ發揮シ延イテ東北帝國大學一般ノ學風トナルコト至
ラソコト必セリ是レ實ニ本大學ノ爲ニ賀スヘキ而巳ナラス抑亦國家ノ慶事ト謂フヘキナリ
爰ニ我カ士民ノ冀望ノ焦点トモ謂フヘキ大學一部ノ開校式典ニ際シ英三郎宮城縣民ヲ代表シ
テ聊カ卑懷ヲ陳ヘテ祝詞トス
明治四十年九月十一日

宮城縣知事從四位勳二等 龜井英三郎

次ニ橋本教授ハ左ノ祝詞祝電ヲ披露ス

衆議院議員元田肇祝詞

維時明治四十年九月十一日東北帝國大學農科大學開設ノ典ヲ舉ケラレ某亦此盛典ニ列スルノ
光榮ヲ許サル幸慶何物カ之ニ加ヘン願レハ余ノ初テ東京ニ出ルヤ官開拓使假學校ヲ設ルノ舉
アルニ遂ヒ歸フテ之ニ入り始テ西歐ノ學ヲ就キンカ後故アリテ該校ノ一時閉止セラル、ニ會
シ余ハ遂ニ之ヲ去ルノ止ムナキコト至リ幾クモナクシテ該校ハ北海道札幌ニ移轉セラレタルコ
ト時ニ當年學友諸氏ノ音容ヲ夢想シ該校ノ發達隆昌ヲ祈ルノミナリシカ歲月勿々茲ニ三十五
年昨夏偶々北海道ニ遊ヒ札幌ニ至リテ農學校ヲ視童時ノ遺物ヲ撫シ頓ニ懷舊ノ情ニ堪ヘス殊
ニ校長佐藤博士其他本校ニ關係アル教授贊助員諸君ノ懇篤ナル紹介ニ依リ開拓使假學校以來

ノ經過ヲ詳カニ今ヤ其設備完整著名ノ學士博士輩出シ毫モ大學タルニ耻ヂサルノ實見ヲ知
リ諸君カ切ニ之ヲ進メテ北海道大學トナサントスルノ希望ヲ贊シ竊ニ其成功ヲ祈リシカ政府
亦其實績ヲ看取セラレ遂ニ該校ヲ進メテ東北帝國大學農科大學トナスノ命アリ本日ヲ以テ開
校ノ典ヲ舉行セラル、ニ至レリ豈欣賀セザルヲ得ンヤ思フニ北海道ノ地タル帝國ノ小米洲ニ
シテ風物雄大氣候清爽特ニ本校ノ所在地タル札幌ノ風色ニ至テハ豪壯ノ景裡自カラ靜麗幽逸
別ニ小天地ヲ成ヌ宛カモ劍橋大學ニ遊フノ感アリ由來深奥ノ學理ヲ闡明シ高尚ノ氣風ヲ修養
スルハ土地ノ關係頗ル大ナリ而シテ本校ノ如キハ最モ之ニ適スルモノト云フヘシ加ルニ學長
佐藤博士ノ切實精緻ナル經營ト有名ナル教授諸君ノ懇切ナル指導トヲ以テス本大學ノ益々隆
昌ニ赴キ世界の大偉人ノ輩出スルニ至ラソコト期シテ待ツヘキナリ某盛典ノ末席ニ參列スル
ノ招狀ヲ辱シ欣喜ニ堪ヘス偶々微恙ノ爲ニ此光榮ニ參與スルヲ得ス茲ニ燕祝ヲ呈シ謹テ慶祝
ノ微衷ヲ表ス

元田肇

- 高松郵便局長 武井友貞祝電
- 室蘭支廳長 山浦常吉祝電
- 學習院教授 原十太祝電
- 古河礦業會社 古河虎之加祝電
- 木村長七祝電

陸軍三等獸醫正 田澤直孝

東北帝國大學

農科大學長農學博士佐藤昌介殿

祝詞

國家ノ隆替ハ教育ノ振否ニ在リ日本帝國ハ戰勝ノ後ヲ承ケ大ニ國運ノ發展ヲ期スルニ方リ海
陸ニ無限ノ寶庫タル我カ北海道ハ宜シク教育機關ノ完成ニ依リ學術ノ進歩ヲ修メ其ノ應用
ニ賴リ以テ國富ニ資セヌハアラス廟堂愛ニ見ルアリ東北帝國大學農科大學ヲ本區ニ創立セ
ラレ國家ノ爲洵ニ慶賀ニ堪ヘサルナリ抑モ北海道大學ノ設立ハ多年道民ノ唱道スル所コシテ
況ンヤ本道教育ノ淵藪タルヲ期待スル札幌ハ常ニ熱望已ム能ハス是ヲ以テ夙ニ大學期成同盟
會ヲ設ケ建白ニ請願ニ切ニ其ノ徹衷ヲ貫徹セシコトヲ期セリ今ヤ幸ニ分科大學ヲ設置セラレ
區民宿昔ノ希望ハ其ノ大半ヲ達スルヲ得タリ本日開校ノ盛典ヲ舉ケラル、ニ際シ不肖其ノ席
未ヲ汚スノ光榮ヲ荷フ感喜言ハント欲スル所ヲ知ラサルナリ聊カ燕辭ヲ陳シテ祝意ヲ表シ前
途益隆盛ナランコトヲ祈ル

明治四十年九月十一日

札幌區長從五位勳四等 青木定謙

祝詞

札幌農學校ノ此地ニ創設セラレシヨリ年ヲ經ルコト爰ニ三十學風一世ニ高ク濟々タル多士年

ヲ遂フテ輩出ヤ東北教化ノ淵源トナリ本道今日ノ發達亦半ハ其力ニ依ル其國家ニ貢獻スルノ
多大ナルコト世人ノ夙ニ認ムル所ナリ今ヤ日露戰役ノ後ヲ承ケ教育ノ效果愈著シシ世ニ唱道
セラル、ニ當リ其組織ヲ改メラレ東北帝國大學農科大學トシテコ、ニ開校ノ盛典ヲ舉ケラル
洵ニ是レ學界ノ盛事文化ノ隆兆其將來國家ノ發展ニ資シ世界ノ進運ニ益スルモノ蓋シ豫測ス
ルニ足ル惟フニ創立各學校ハ皆中學程度ノ學校大學ニ對シテハ常ニ先輩長者ノ威ヲ以テ敬事
ス其日夕誘掖指導ヲ受クルモノ蓋シ少カラス我等今此盛典ニ陪スルノ幸榮ヲ得其感殊ニ深シ
希クハ本大學ノ前途益隆盛學風愈高潔我等ヲシテ嚮フ所ヲ知ラシメ北海ノ學風遂ニ天下ノ模
表タルニ至ランコトヲ願立各學校長一同ニ代リ聊カ燕言ヲ陳シ以テ祝詞トス

明治四十年九月十一日

北海道廳立各學校長總代

札幌中學校長從六位 尾原亮太郎

祝詞

拓殖ノ大業ハ人材ノ輩出ニ淵源シ人材ノ養成ハ教育ノ整備ニ職由ス明治初年國家多事ノ間ニ
於テ札幌農學校ノ設立セラレシハ實ニ之カ爲ナリ爾來三十二年常ニ優良ノ人材ヲ供給シテ本
道ノ拓殖ニ貢獻シ傍ヲ北方ノ學府トシテ國民知能ノ啓發ヲ促シ帝國ノ教育ニ多大ノ效益ヲ及
セリ其功偉ナリトイフヘシ

興國ノ盛運ニ伴テ札幌農學校ハ進シテ班ヲ大學ニ列セリ大學ハ國家最高ノ學府規模ノ大設

惟フキ世界文物ノ發達ハ日ニ月ニ精巧ニ赴キ時ト共ニ進歩ヲ極ム而シテ維新以後著シク發達
 セル帝國カ更ニ日露戰役後此激烈ナル趨勢ニ乘リ世界ノ角立スヘキ域ニ達スルニ及ビ大學ノ
 設立増加ノ要求アルハ又偶然ニアラザルナリ識者茲ニ見ル所アリ特ニ東北大學中ノ農科ヲ此
 地ニ置ク本道ノ面目トシテ大ニ悦ムヘキモノアリ殊ニ既往ニ期ケル北海道ハ唯ニ殖民時代ト
 シテ見ルヘキモノニシテ未タ特色ヲ表シ得タルモノニアラス向後更ニ幾多ノ改良進步ヲ加ヘ
 産業上遺利ナキニ及ビ初メテ帝國ノ實庫タルヲ得シカ果シテ然ラハ之ヲ改良進步セシムヘキ
 確實ナル學理ト緻密ナル實驗トハ何レモ之ヲ仰カントスルカ蓋シ道民ノ本校ニ俟ツ所ノモノ
 實ニ妙シトセス莫クハ大學ノ他ノ科ニ比シ本道ノ最も親密ナル關係ヲ有スル當校長ヘニ健全
 益々隆盛ニ以テ實庫ノ實ヲ舉ケシメ社稷ノ發展ニ遺憾ナカラシメンコトヲ不肖兵衛此處
 方ナル席末ニ列スルノ光榮ヲ得テ衷心樂シ難ク茲ニ恭辭ヲ陳シテ祝詞トナス

明治四十年九月十一日
 北海道會議員 小野寺 喜兵衛

東北帝國大學農科大學ヲ立テセラレタルハ北海道開闢ノ基也隨テ祝辭ヲ呈ス
 明治四十年九月
 石狩國濱益郡 本 間 豊 七
 東北帝國大學農科大學ノ開校ヲ祝シ併テ將來ノ發展ヲ祈ル

明治四十年九月十一日

- | | | |
|-----------|-------------|-------|
| 在 臺灣 | 藤 根 吉 春 | 井 街 順 |
| 色 部 米 作 | 企 子 昌 次 郎 | |
| 川 上 泷 彌 | 小 田 代 慶 次 郎 | |
| 河 野 市 治 郎 | 長 嶺 林 三 郎 | |
| 長 崎 常 | 小 谷 武 治 | |
| 十 川 嘉 太 郎 | 鈴 木 力 治 | |
| 東 郷 實 | 吉 田 碩 造 | |

開校ヲ祝シ併テ將來ノ發展ヲ祈ル
 明治四十年九月十一日

備中國高梁町 荒 井 寅 治

謹テ東北帝國大學農科大學ノ開校ヲ祝ス
 明治四十年九月十一日

此外札幌農學校卒業生ヨリ送り來レル祝電如左
 舊札幌農學校農畜科第十五期生 角 館 喜 一 郎
 鹿 兒 島 岩 崎 行 親 青 森 縣 技 師 中 村 鐵 太 郎
 在 東 京 三 輪 龍 揚 廣 島 縣 地 主 齋 藤 定 彦

臺	澤	同	窓	會	支	部	兼	廣	關	又	一
東	京	波	瀨	寅	二	郎	ヲ	カ	田	中	慎
長	福	岡	縣	直	方	町	中	根	明	同	中
長	崎	友	高	善	嗣	恒	春	長	嶺	林	三
											郎

午後一時閉式

佐藤學長文部大臣以下來賓ヲ導テ響應席ニ就ク文部大臣ノ式場ヲ出ツルヤ小學生徒又旗ヲ揮テ

萬歳ヲ祝ス 響應終リテ佐藤學長文部大臣其他重ナル來賓ヲ導テ各講堂ヲ巡覽ス 是日臨場シタル來賓ハ

文部大臣牧野伸顯、普通學務局長白仁武、秘書官赤司鷹一郎、北海道廳官河島醇、事務官高岡直吉、第七師團長上田有澤、第十三旅團長平井正衛、帝國鐵道廳技師野村龍太郎、北海道帝國鐵道廳管理局長野村彌三郎、函館控訴院長馬場恩治、函館控訴院檢事正池上三郎、青森縣知事西澤正太郎、宮城縣知事代理理事務官下條幸次郎、貴族院議員鶴池定基、衆議員議員淺羽靖、橋本久太郎、松井源内、北海道廳御料局支廳、札幌裁判所礦山監督署、郵便局、稅務監督署、聯隊區司令部、第二十五聯隊等諸官衙高等官、師範學校、中學校、女子高等學校、委任待遇者各小學校長、札幌區長、病院長、學士、道會議員、區會議員、商業會議所議員、

諸會社重役、新聞記者、寺院住職、教會教師、大學寄附金者、札幌農學校卒業生、學校關係者等ニシテ八百數十人ナリ

午後四時ヨリ中島遊園地西宮支店ニ於テ札幌區有志者開設シタル鐵道開通大學開校祝賀會アリ招待シタル者三百餘人ニシテ盛大ナル祝宴及餘興アリ

午後六時ヨリ職員大學生及各科生徒提燈行列ヲナシ私立北海道中學校生徒モ之ニ參加ス正門ヲ出テ停車場通ヲ進ミ文部大臣旅館山形屋ノ前ニ至リ萬歳ヲ唱ヘ又同窓會ノ前ニ於テモ萬歳ヲ唱ヘ北二條南一二三條等ヲ巡行シ十時歸學退散ス學生々徒ノ唱歌左ノ如シ

開校祝賀の歌

- 一、神 統 二 千 五 百 年 東海の果に眠りたる 見よや自覺めて明治の世
- 大和島根の民衆は 進取の旗を振り立てぬ
- 天の使命を果すべく 地上を西し東せる
- 二、天に二つの日なれば 日出つる國に相會し
- 文化の潮渦巻きて 乾神 茲に光あり
- 炳焉として虹の如し 先づ北邊の島の上
- 三、此の國運に魁し 不明を教へ道を樹て
- 荒蕪を拓き民を植へ

進取の民の絶たりし
 四、此の民衆を導きて
 我札幌に建てられし
 北辰高く輝きし
 五、今や羽翼を整へて
 國の使命を掲げて
 坤輿の民の師たるへき
 六、思へ嘗ては北辰と
 意氣争ひし校風を
 高く大きく清らなる
 七、功利若し世の風たらは
 遊惰若し世の俗たらは
 邪曲若し世の弊たらは
 八、嶮岩に雲の峯そひて
 我等の歌に懽喜と

百萬の民若かりき
 重き使命に負かしと
 祖校よく其任に耐へ
 其名聲や將た説かし
 德乾坤を被ふへき
 千餘の學徒を應き
 新職分は下りたり
 光を競ひ白雲と
 享けし我等の前程は
 希望の色に溢れすや
 其所に我等の戦あり
 其所に我等の戦あり
 其所に我等の戦あり
 平和の歌をなすか如
 壯嚴の色動く如
 自信の響こもれかし

明治四十年十二月二十五日印刷
 明治四十年十二月二十八日發行

東北帝國大學農科大學

印刷者 高橋壽太郎
札幌區南二條西三丁目十二番地

印刷所 赤心堂活版所
札幌區南二條西三丁目十二番地

發賣所 富貴堂書房
札幌區南二條西三丁目

電話 二五七番
 振貯 七二二番

291

12

民國二十九年十月二十日

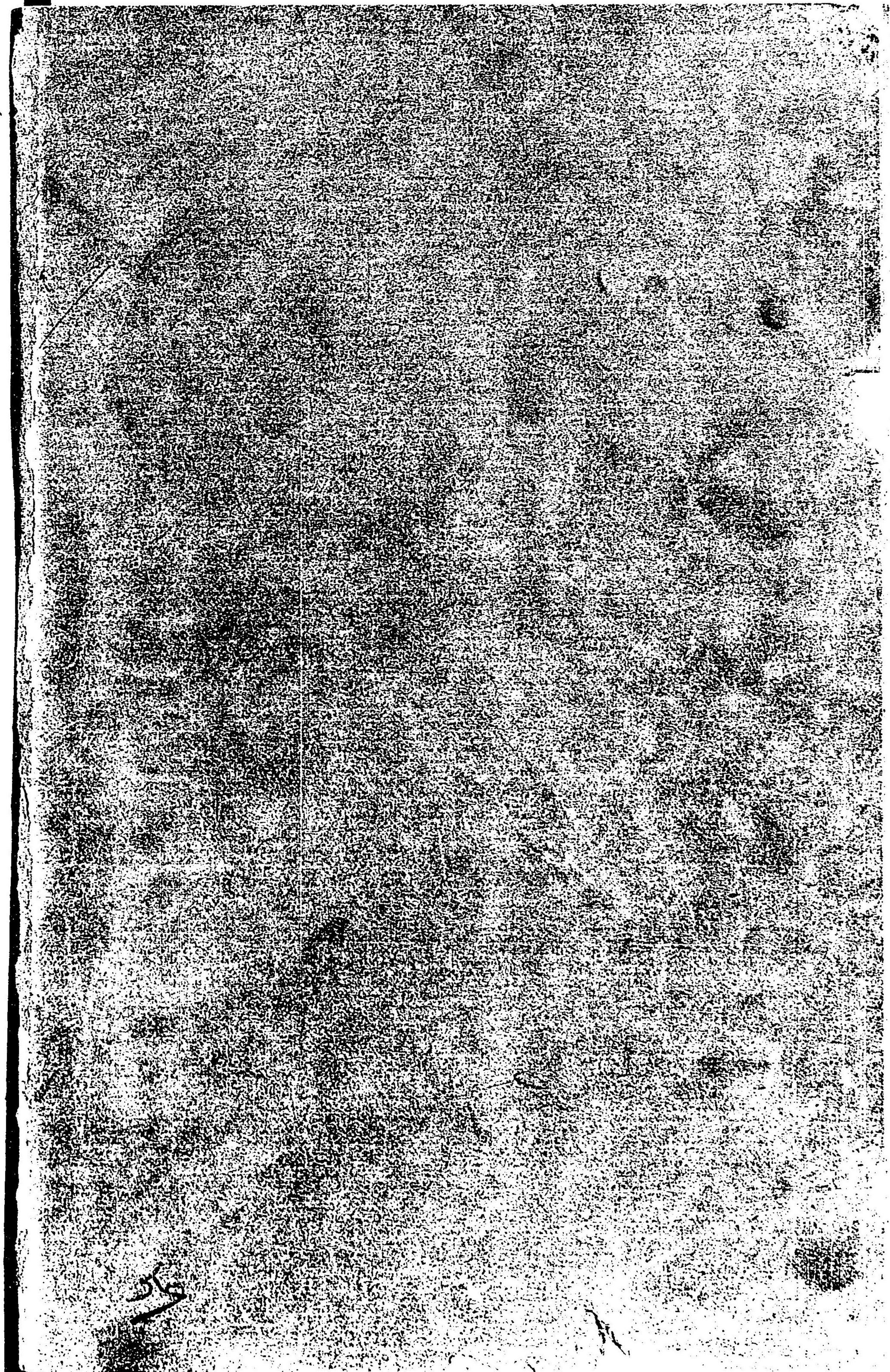
中華民國二十九年十月二十日

中華民國二十九年十月二十日

中華民國二十九年十月二十日

中華民國二十九年十月二十日

中華民國二十九年十月二十日



048917-001-9

291-2

東北帝国大学農科大学一覽

東北帝国大学農科大学

M40-44

BEJ-0703

